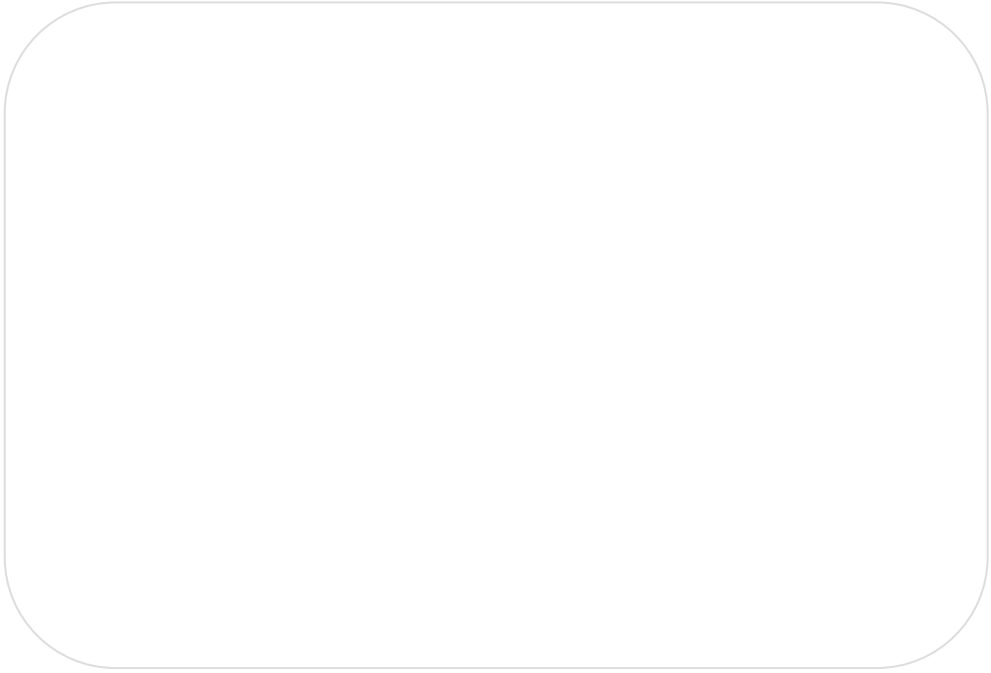




Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



一橋大学イノベーション研究センター

東京都国立市中2-1
<http://www.iir.hit-u.ac.jp>

創造的転回

知識についての知識の改善運動とその変遷

一橋大学イノベーション研究センター

特任講師 木村めぐみ

要旨

本論文では、知識の問題に取り組んできた人々とその仕事を通じて、創造的転回について検討した。創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスである。第一に、知識の問題とは、主観性の立場の対立を通じて発見できる、認識と認識における時間の問題であり、言葉やものに内在する経験、意味、合理性、より社会的には倫理と権力の問題である。第二に、その解決に向けた動きを先導してきたのは、啓蒙の時代に、ギリシャから継承した見方や考え方の限界や矛盾を問題化した人々の活動や仕事であり、この運動は、啓蒙の時代が体験された場所にいた人々を中心に進んだ。第三に、彼らが観察し、描写したのは、啓蒙の時の民主化による、知識創造のパラダイムシフトと呼ぶことのできる二つの社会的プロセスであり、21世紀になると、欧州の政府、産業、大学には、創造的転回を企てる動きも観察できるようになった。創造的転回は、これまでの「描写された」イノベーションとは異なる、「体験された」イノベーション、つまり、創造という社会的プロセスの前提である。

創造的転回

知識についての知識の改善運動とその変遷

一橋大学イノベーション研究センター
特任講師 木村めぐみ

1. はじめに

本論文の目的は、知識の問題に取り組んできた人々とその仕事を通じて、創造的転回について検討することである。

創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスである（木村 2017）。情報技術の進歩は、特に、科学、芸術、技術に関与する人々とその仕事、その設備を設けてきた政府、産業、大学に変化を求めてきた。しかし、自然科学と異なり、社会科学、特に政治経済分野は、この変化への適応が進みにくく（Hayek 1952, Kuhn 1962）、知識の問題については、半世紀以上の議論があるものの、その成果もほとんど共有されていない。それにもかかわらず、知識の問題の解決の先にあるはずの学際研究や産学連携への要請は増える一方である。そもそも、知識の問題はいかにして提起され、解決されようとしてきたのだろうか。

創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスである。第一に、知識の問題とは、主観性の立場の対立を通じて発見できる、認識と認識における時間の問題であり、言葉やものに内在する経験、意味、合理性、より社会的には倫理と権力の問題である。第二に、その解決に向けた動きを先導してきたのは、啓蒙の時代に、ギリシャから継承した見方や考え方の限界や矛盾を問題化した人々の活動や仕事であり、この運動は、啓蒙の時代が体験された場所にいた人々を中心に進んだ。第三に、彼らが観察し、描写したのは、啓蒙の時の民主化による、知識創造のパラダイムシフトと呼ぶことのできる二つの社会的プロセスであり、21世紀になると、欧州の政府、産業、大学には、創造的転回を企てる動きも観察できるようになった。創造的転回は、これまでの「描写された」イノベーションとは異なる、「体験された」イノベーション¹、つまり、創造という社会的プロセスの前提である。

本論文では、知識の問題に取り組んできた人々とその仕事を通じて、創造的転回について検討する。はじめに、20世紀を通じて起きた知識についての知識の改善運動の変遷を辿る。次に彼らを使用していた言語（ドイツ語、英語、フランス語）との関係性を通じて、その仕事を整理する。最後に、知識の問題の解決に関わる、二つの社会的プロセスについて検討する。

2. 「知識の改善運動」と知識についての知識の改善運動

2.1 創造的転回

創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスである。木村(2017)は、日本企業の事例を通じて、人々の内的な推進力を創出し、集団的な飛躍を実現するプロセスを構成する人と、その仕事、その結果として現れる変化として創造的転回について論じた。しかし、創造的転回をめぐる議論は、これまで知識の問題に取り組んできた人々の仕事を通じて、もう少し前に進めることができる。20世紀を通じて起きた、知識についての知識の改善運動は、記録に残された創造的転回とも言え、認識と認識における時間の問題の解決、つまり、主観性の立場を超えた議論の可能性、必要性、方法についての知見を提供してきた。知識の問題は、存在する言葉や物に内在する経験、意味、合理性、より社会的には、倫理と権力の問題でもある。

知識についての知識の改善運動が知らせたのは、「知識の改善」運動²と呼ばれた啓蒙の時代の後でさえ、フランシス・ベーコン[1561-1626]が語っていた問題をまだ解決できていなかったことである。「軽信、疑いに対する反感、いいかげんな応答、教養を鼻にかけ、反対するのを憚ること、打算からくる不公正、自分の手を使った研究の等閑視、言葉の物神崇拜、部分的認識への停滞³」。啓蒙の時代の人々は、自然界と人類の世界を直接観察することによって、新しい道を切り開くことができると信じ⁴、ギリシャの芸術、プラトンやアリストテレスの著作を手本に、それまでとは異なる新しい知識を探求していた。1759年には大英博物館が開館し、18世紀半ばから後半のフランスでは、百科全書派と呼ばれる人々が『百科全書、あるいは科学、芸術、技術の理論的辞典』を編纂した。以後、しばらくは、ギリシャから学んだことが正しい知識として共有され、博物館や美術館も、その基準で質的判断を行ない、展示物を選択していた。

知識についての知識の改善運動は、いわゆる「言語学的転回」⁵を中心に、人々がここへと導かれるプロセスと、さらには、その限界や矛盾を乗り越えようとする人々の動きまでを指している。啓蒙の時代が体験された場所では、知識の問題を根源的に解決しようと、言語の構造や意味作用に関心を寄せる人々が現れ、ギリシャから学んだことの限界や矛盾が問題化されるようになった。言語学的転回も今では問題視されることの方が多いものの、その理由は、存在する言葉やもの、そして人の存在そのものが社会現象であること、その時と場の状態を明らかにできるだけだったからである⁶。このことは、エドムント・フッサール[1859-1938]も、『論理学研究 1』「表現と意味」で示唆していた⁷ものの、彼のように、独・英・仏語が飛び交っていたオーストリアのような場所にいなかった人々は、この限界を知るために言語学的転回を体験しなければならなかった。こうして、ようやく観察者中心の静的、動的、人文的な次元を超えた、創造的な次元の議論の可能性が出現したのである。

2.2 知識の問題

知識の問題とは、形而上学、もう少し日本で馴染みがある言葉を使えば、いわゆる文系の見方や考え方、主観性の立場の対立を通じて発見できる、人々の認識と、認識における時間の問題である。

まず、日本に根深く浸透している、文系・理系という分け方は、アリストテレスの「第一哲学」と「第二哲学」に由来する。かつては、自然科学を担う人々も、「科学者 Scientist」ではなく、「自然哲学者 Natural Philosopher」と呼ばれていた。第一哲学を起源とする形而上学は、オックスフォード英語辞典によると、次のような学問である。「存在、物質、時間と空間、因果関係、変化、アイデンティティに関する問いを含む、ものや現実の第一原理を扱う哲学の一部。存在と知ることについての究極の科学としての理論哲学」⁸。形而上学が扱うテーマを考慮すれば、とりわけ教育や研究の場において、知識の問題が「文系」に属する人々だけに関わるわけではないことがわかる。

知識の問題とは、主観性の立場の対立を通じて発見できる、認識の問題である。Taleb (2007)の言葉を借りれば、プラトン化、つまり、「天下りで型にはまっていて、凝り固まってご都合主義で陳腐化した考え」に陥った人々の問題でもある。久米 (2007) は、現実性の問題を哲学に突きつけた英国哲学の貢献と、形而上学的な根拠からではなく、人間の視点から理解するその傾向を指摘している。この問題に取り組んだ人々には、バートランド・ラッセル[1872-1970]、ジョージ・エドワード・ムーア[1873-1958]、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン[1889-1951]がいた。彼らの仕事に始まる議論の変容こそ、Bergmann (1967)が「言語学的転回」と呼んだ運動である⁹。

認識の問題とは、認識における時間の問題であり、ベルクソン (1888, 1907) のいう「持続 duration」が分断されることである。持続とは、「未来を侵食し、前進しながら膨らんでいく過去の連続するところの進展」であり、もう少し簡単に説明すると、人によって異なる、存在する言葉やものの解釈の次元の違いが考慮されないことである。その後の人々が解決しようとしたのは、存在する言葉やものの意味についての無理解や、議論が行われなかったことによって生じる、権力と倫理に関する問題である。マルティン・ハイデッガー[1889-1976]は、『存在と時間』(1927)において、「存在を眼前に見据えて表象するところの、主観性の立場を表現する」形而上学の限界と矛盾を指摘した。「形而上学は、いかなる仕方で、人間の本质が、存在の真理に帰属しているのかをも、決して問わない」ため、存在の意味についての議論を通じて、その問題を乗り越えようと提案したのである。『ヒューマニズムについて』(1947)では、形而上学からの解放、つまり、主観性を捨て去って別の思索を行うきっかけになる現象を「転回」と呼んでいる。

創造的転回アイデアは、ベルクソンとハイデッガーの議論に由来する。

2.3 言語学的転回

知識についての知識の改善運動は、言語学的転回と呼ばれてきた現象と、人々がそこに入り込んでいくプロセス、さらに、その限界や矛盾を乗り越えようとする人々とその仕事である。Bergmann (1967)は、論理実証主義と呼ばれた哲学の運動のうち、特に言語に着目した人々の議論を言語学的転回と呼んでいる。論理実証主義はウィーンに始まったが、言語学的転回の起点は、ウィトゲンシュタインがウィーンから英国に渡った後に論じ始めた、「言語ゲーム」にあるという。彼は、人々の言葉の使用に注目することによって、伝統的な哲学の問題を超えた議論の可能性を探求しようとした。Rorty (1967) は、言語学的転回について、次のように説明している。「いわゆる『言語論的転回』の要点は、われわれはかつてアリストテレスとともに必然性は事物に由来すると考え、やがてカントとともにそれはわれわれの心の構造に由来すると考えたのに対して、今ではそれが言語に由来することを知っている、ということにあると考えられている。しかも、哲学は必然的なものを探し求めねばならないのであるから、哲学は言語論的にならざるを得ないのである」¹⁰。

言語学的転回に関与した人々については諸説あるが、さらに遡って、構造主義言語学の始祖と呼ばれる、フェルディナンド・ソシュール[1857-1913]を中心に説明されることも少なくない。その理論実践分野は、一般言語学(1877-1894年ごろ)と記号学(1894-1913)の二つの領域で区別され、彼の仕事は、「まず、プラトンや聖書以来の伝統的言語観である言語命名論の否定から出発」した。それ以前、言葉は表現でしかなかったが、彼は言葉を「表現であると同時に意味であると考えた」(丸山 1984)。ソシュールは、「静態的な構造主義から入ってその壁に突き当たり、自らを否定する形で力動的な記号学を求めた」(丸山 2012)。言語学的転回は、今日では問題視されることも多いが、観察者が主観性を捨て去るには、まず、存在する言語やものに着目し、その限界を知るという体験が必要なのである。

知識についての知識の改善運動とは、言葉や物への注目によって、その限界や矛盾に直面した時にのみ可能な、過去の限界や矛盾を超えた知識の再構築のプロセスについての議論とその変容である。限界や矛盾の要因は、観察者を取り巻く状況、あるいは場の状態にあり、場の状態についての議論には、次のような考え方も紹介できる。一つは、「各言語の語彙は意味的に関連のある語群の集合によって構成されると考える」(現代言語学辞典 1987) 意味の場の理論である。代表的な議論は、古代ジャワ語の研究を通じて、言語一般の根本的統一性と多様性の議論を行なったヴィルヘルム・フォン・フンボルト[1767-1835]のあとをついだ新フンボルト学派やロマンス語派¹¹と呼ばれる人々の仕事である。もう一つは Ogden & Richards (1923) の「意味の三角形 semantic triangle」と呼ばれる、記号 symbol、その記号が表すもの thing、あるいは概念 concept を媒介して間接的に関係付けられる意味のモデルである。

3. 知識の問題の提起・普及・解決

3.1 ドイツ語圏における知識の問題の提起

知識についての知識の改善運動は、主に、啓蒙の時代を体験された国々において起きたが、その動機となった問題が提起されたのは、20世紀初頭のドイツ語圏であった。

マルティン・ハイデッガーは、1927年に、『『存在』の意味を問う問いを具体的に練り上げ]、「時間を検討し、それが事によると存在了解全般の地平であることを示すこと」を目標に、『存在と時間』を書いている。問題は、「一連のギリシャ的な存在解釈の視座を地盤として、そこに一つのドグマが形成され、このドグマが存在の意味を問う問いなど不必要だと宣告するのに加え、この問いを怠ることにお墨付きまでを与えている」ことにあった。次のようにも言っている。「存在の問いそれ自体にとって、自分自身の歴史の見通しが利くようにしようというなら、硬直した伝統を解きほぐし、この伝統のせいで生じたさまざまな隠蔽を引き剥がす必要がある。この課題を私たちは、存在の問いを手掛かりとして行われる、伝承されてきた古代存在論の実態を解体する作業として理解する」。彼の議論の背景として、ドイツ語圏で起きていた、次のような出来事も言及しないわけにはいかない。

まず、物理学におけるアインシュタインの登場である。20世紀の幕開けとともに進められたその仕事のうち、彼を20世紀最大の物理学者の地位へと押し上げたのは、1905年に発表された三つの研究、光電効果の理論、ブラウン運動の分子運動学理論、特殊相対理論である。相対論は、電磁気学の相対性原理のなかに表現されていた時間と空間についての新しい発見であった。それまでの物理学は、ニュートン力学やマクスウェルの方程式を基礎に進んでいたが、相対論は、現在、物質の基礎理論である場の理論をはじめ、物理学全ての基礎となっている。なお、ニュートン力学とは、アインシュタインの相対性理論を元にした相対論的力学及び量子力学に対して言われる、ニュートンが確立した運動の法則を基礎に形成された力学の体系である(物理学辞典編集委員会 2005, Gray & Isaacs 1991, Daintith 1976)。

ドイツ東部には、ブリュッケというドレスデン工科大学の学生らの集団が登場した。独学で絵画の勉強を始めたメンバーは、「まず破壊し、諸価値を粉砕しなければならない」といったニーチェ[1884-1900]の言葉(『この人を見よ』(1908)の一節)のもとに活動した(Jahner 1984)。彼らとそれに続く、政治、経済、社会の限界や矛盾を表現する運動は、のちに表現主義と呼ばれ、文学や音楽、映画や建築にまで拡張されていった。この時期に発行された雑誌『青騎士』(Kandinsky & Marc 1912)の目的は「芸術においてフォルムの問題は副次的なものであり、芸術の問題はもっぱら内容の問題だという事実を、実例や実際的な編成や理論的証明によって示すこと」にあった。内部からの形式の破壊の議論は、ハイデッガーのみならず、シュンペーターのいう「創造的破壊」にも反映されている。なお、ポツダムにある、相対性理論を実証するアインシュタイン塔は、表現主義を代表する建築である。

3.2 英語圏における知識の問題の普及

1960年代の英国には、知識の問題をよりシンプルかつ広範囲に共有する人々が登場した。まず、C.P. スノーによる、1959年のケンブリッジ大学で行われたリード講演『二つの文化と科学革命』である。スノーは、文学的知識人と科学者（特に物理学者）を事例に、イングランド特有の問題として、彼が「生まれながらのラッドライト」と呼ぶ知識人たちの問題を提起した。スノーは、自らと仲間が共有していた問題を、「二つの文化」という言葉で表し、「地球全体にこだまし人々の心を奪い挑発し続けているテーマを、公開討論のスポットライトの中へ押し出していた」（Collini 1993）。スノーが行なったのは、すでに指摘されていた知識の問題を、より分かりやすく表現したことである。彼自身が次のように言っている。

「世界のあらゆる国ぐにの、色々な知識人の社会で、ほとんど同時に興奮が伝わるというのは、この反応を引き起こした思想が決してオリジナルなものではありえないということである」。『二つの文化』への反応が見られた場所の一つは、時間を重視する歴史家たちのコミュニティであった。例えば、Carr (1961)は、次のように言っている。「歴史を科学と呼ぶことを拒否するのに対して私がもっぱら反対いたしますのは、これを拒否したら、謂わゆる『二つの文化』の間の亀裂を弁護し永久化することになるからです」。

しばらくすると、歴史家たちの間でも「言語学的転回」が観察され、結果、「多くの歴史家は、階級を土地、資本、労働間の厄介な関係や政治闘争の研究とはみなさなくなり、階級は人々が使用した言語の研究と見なされるようになった」（Cannadine 1998）。1980年代になると、「言語学的転回」の限界や矛盾を越えようとする動きも見られた。Hobsbawm (1983)の『創られた伝統』など、分野や領域を超えた思索や観察、研究が行われ、人によって創られた存在とその意味をめぐる研究が進んだ¹²。同じ年に、Anderson(1983, 1991)の『想像の共同体』が出版されると、観察者ではなく、観察される人々のイメージや意識を通じて、過去の出来事を眺め直そうとする動きも起きた。例えば Colley (1992)は「常に文化的にも民族的にも不均質で、問題の多い、できたかと思うとすぐに壊れる移ろいやすい人々の構築物」として国民概念を描き、英国民のアイデンティティが形成されたプロセスを論じた。

1960年代初期の英国には、カルチュラルスタディーズも誕生し、この「理論的明晰さの継続的作業」（Hall 1980）は、「以前であればアカデミズムの知識から排除されてきた終焉的で俗悪とみなされていたもの」に着目することによって、「社会的プロセス、社会的実践、社会的意味の最も基本的で根幹をなすもの」を観察した（Turner 1996）。そのメンバーは、「伝統的な様式の人文学述に対する攻撃」を代表し、彼らの活動は、「善および美についての特定の理解を排除しようとしてきた運動」とも呼ばれた。カルチュラルスタディーズは、複雑性研究とともに、「知の領域を科学と哲学との分離によって 19 世紀に閉じられてしまった新しい可能性を『開く』ことを目指すものだった」（Wallerstein 1993）。

3.3 フランス語圏における知識の問題の解決に向けた議論

知識の問題の解決に向けた議論を行なったのは、1960年代から1980年代までのフランス語圏にいた人々であった。

まず、ミシェル・フーコー[1926-1984]である。彼は、「思考様式、権威の関係、性の関係、私たちが狂気や病を知覚するやり方、などに関するいくつかの領域で20年来に起こってきたような非常にはっきりとした変化」(Foucault 1984)についての著作をいくつも発表してきた。『監獄の誕生』(1975)では、パノプティコンにおける囚人を例に、装置、メカニズム、テクノロジーが作り出す規律についての議論を行なった。それ以前にも、『言葉と物』(1966)『知の考古学』(1969)において、ギリシャ語で知識を意味するエピステーメという言葉を使って、「ある時代における様々な学問の成立を可能ならしめる、その時代固有の知の深層構造」について論じている。フーコーもまた、言語から出発して、その機能を通じて、人々の知覚、行動、感情に変化を与えるものへと議論を拡張していったのである。

ジャック・デリダ[1930-2004]は、知識の問題を解決する必要性をより明確にした人物であった。最もよく知られている仕事は、ハイデggerのいう(形而上学の)「解体」destructionという表現について、この言葉が与える衝撃を考慮し、「脱構築 deconstruction」という言葉を使いはじめたことである。デリダは、形而上学の前提と内的矛盾を露呈することによって、「ロゴス中心主義」(真理は言葉で全て説明できるという考え方)や「ファロス中心主義」(広くは「男らしさ」を特権化し、「女性的なもの」を周縁化する男性中心主義:高橋 1998)を批判した。Mouffe (1996)は、「包括的な合意は確立できないことを示す脱構築のようなアプローチが基本的に重要」な理由を次のように説明する。「正義はどの社会の制度のうちにもいずれ具体的な姿で現れるという幻想に対して、脱構築は警告を発する。そういう幻想があるからこそ、脱構築は民主主義に関する論争を活発にすることを求めるのだ。対立が除去し得ないことを指摘することによって、…民主主義的な多元的政治を構築しうる環境が提供されるのである」。

ジル・ドゥルーズ[1925-1995]は、アンリ・ベルクソンの議論から出発し(Deleuze 1966)、『シネマ』論(1983, 1985)では、運動イメージと時間イメージの比較を通じて、いわゆる近代科学と、その後のパラダイムの違いを説明している¹³。人々が「知覚、行動、感情の強力な連結体」であること、そして形成される感覚に影響を与える要素を提示することによって、主観性の立場を超えて別の思索へ向かう際には、人々の欲動イメージ、反映イメージ、関係イメージを考慮する必要性を示唆している。彼の議論は、Pierce (1931-1935, 1958)の議論も借りながら、Metz (1968, 1972)のように、言語学的な見方によって、映画について語ろうとしていた人々への批判でもあったのだから、言語学的転回を超えていく方法を示したとも言える。

4. 創造的転回

4.1 知識創造のパラダイムシフト

知識についての知識の改善運動が描写したのは、知識創造のパラダイムシフトと呼ぶことのできる、知識の問題が社会的に解決されていくプロセスである。パラダイムとは、Kuhn (1962) が『科学革命¹⁴の構造』において使った、「広く人々に受け入れられている業績で、一定の期間、科学者に自然に関する問い方と答え方のモデルを与えるもの」である。通常科学（あるパラダイムにおける、問い方と答え方を通じて問題を解くこと）の伝統の中で累積的進歩が行われているうちに、パラダイムに合わない変則性が現れ、目立つようになってくると、そのパラダイムに危機が訪れ、科学者たちは別のパラダイムを模索し、新しいパラダイムが古いパラダイムに取って代わる、ここまでのプロセスが科学革命だという。「パラダイム」という表現について、クーンは、その定義の不明確さゆえに口撃を受け、1969年には、この言葉を使用した意味についての原稿を書いている。「集団の立場の構成」と「共有する例題」としてのパラダイムについての説明が加えられ、新たに「専門母体 disciplinary matrix」という言葉も提案している。

しかし、言語学の用語や議論を借りれば、パラダイムという言葉の説明も、もう少し容易になる。それ以前から、パラダイムという言葉は、ソシュールやの弟子たちによって、「連合関係」を意味する言語学の用語として使われていた。連合関係とは、「各辞項と体系全体との関係で、そのコンテクストに現れてはいないが、語る主体の選択しだいではいつでも代わって用いられ得る同系列要素群の対立関係」（丸山 1985）である。これを範列関係と言い換えた「ソシュール最大の弟子」（Badir 2004）とも言われるイエルクスレウ（1959）は、「言語体系の場合、類は範列¹⁵ paradigm 断片は成員 member という」と説明した。要するに、パラダイムとは、ある特定の場において、その場を構成するメンバーに共有されている知識の総体であり、パラダイムシフトとは、メンバーの経験、意味、合理性の変化である。

パラダイムシフトは、自然科学だけに関わるわけではない、知識の創造と表現の方法がだんだんと変化するプロセスである。クーンは、自然科学が社会科学に対して、基本的なことについての論争が生じることはない理由を探求していた。しかし、物理学の議論が、力、電気、そして光中心の議論へ、哲学や人文学が、事物、心の構造、そして言語中心の議論へと進んだように、社会科学も、静的 static、動的 dynamic、人文的 humanistic な議論へと進んでいる¹⁶。ただし、Hayek (1952)がいうように、社会科学の中でも、政治経済分野は、現象を「主題が科学的かはたまた哲学的かなどいささか気を揉むことなく」叙述してきたから、他の分野では 20 世紀に見られた変化が起こりにくい。変則性が現れ、目立ってきてても、別のパラダイムを模索する人々が現れるとは限らないし、古いパラダイムも残り続けるのである。

4.2 啓蒙の時の民主化

知識についての知識の改善運動が描写したもう一つの社会的プロセスは、啓蒙の時の民主化である。ミシェル・フーコーは、その『啓蒙とは何か』(1984)において、イマニュエル・カント[1724-1804]の『「啓蒙とは何か」に対する答え』を取り上げた。1784年11月に出版された雑誌「ベルリン月刊」に掲載された原稿である。ここでカントは、啓蒙を「人間が自分の未成年状態から抜けでること」、未成年状態を、「他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である」と説明している。カントは「啓蒙の時代」と呼ばれた時代に生きたが、次のような理由で、啓蒙の時代に生きてはいるものの、人々はまだ啓蒙されていないと指摘した。「宗教上の事柄についてもはや他人の指導がなくても自分自身の悟性を確実、適切に使用できるか、或いはせめてそうする見込みがあり得るかと言えば、まだなかなかその域には達していないのである。」

Pagden (2013) がいうように、たとえ「啓蒙」という同じ言葉を使っている、ドイツ語圏、英語圏、フランス語圏では、その捉え方が大きく異なる。イングランドの場合、啓蒙(Enlightenment)の時代は、世界中から情報を獲得することによって、それまでの知識が改善された運動として捉えられ、今日、ロンドンにある科学博物館に行けば、この時代と産業革命との因果が展示されている。フランスの啓蒙(Lumières)の時代は、封建的、絶対主義的な国家体制が解体され、近代社会を目指す人々が自由あるいは民主主義を獲得しようとした出来事の背景として語られることが多い。しかし、啓蒙をめぐる議論が最も長く続いたのは、ドイツ語圏である。先にカントの記述を引用したように、啓蒙の時代(Aufklärung)と啓蒙という概念(Aufklärer)は同じようには語られなかったし、Horkheimer & Adorno (1947)は、啓蒙の時代の後にさえ起きていた知識の問題について論じている。

啓蒙とは何か。フーコーは、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル[1770-1831]、フリードリヒ・ニーチェ[1844-1900]、マックス・ウェーバー[1864-1920]、マックス・ホルクハイマー[1895-1973]やユルゲン・ハーバーマス[1929-]の名をあげ、「直接的にせよ、間接的にせよ、この同一の問いに直面しなかったという哲学は皆無なのだ」と述べている。カントを含め、啓蒙について考えてきた人々のほとんどはドイツ語圏出身であった。一方、フランス語圏にいたフーコーは、啓蒙を一つの社会的プロセスとして論じ、そこに入り込んでいく社会的存在としての人々に見られる共通点について論じている。彼の1960年代のテキストは、言語学的転回を構成する議論にも数えられてきたのだから、その「啓蒙とは何か」という問いは、言語学的転回を超えた先の議論に位置する。出来事としての啓蒙の時代は、限られた人々中心に進められたが、フーコーは、限られた人々だけの体験を、もう少し規則的な現象として言語化し、伝達・共有しようとしたのである。その体験とは、「権力と能力との諸関係の間のパラドクス」に示される、「歴史的批判的実践」である。

4.3 知識経済と競争の変化

創造的転回は、啓蒙の時の民主化による知識創造のパラダイムシフトと呼ぶことのできる二つの社会的プロセスによって構成される現象である。

21世紀の欧州では、政府、産業、大学にも創造的転回を企てる動きが観察できるようになった。より具体的には、知識経済¹⁷や共同経済(collective economy)¹⁸といった言葉を使って、情報技術の進歩と、それに伴う社会的変容に対応しようとしてきたのである。2000年には、「EUを世界で最もダイナミックで競争力のある知識経済にする」ことを目的に、リスボン戦略を掲げている。この戦略を構成するのは、持続的な経済成長、より多くのより良い雇用、社会的結束の強化という三つの目標であった。しかし、2005年3月の中間評価では、戦略の進捗の遅れが指摘されている。その結果、「優先分野の絞り込み、政策間の整合性の重視、EU加盟国と欧州委員会の役割分担の明確化、実行プロセスの簡素化、政治的責任の明確化」が必要になった(NEDO 2007, 2008)。この出来事は、知識の問題の解決や、情報技術への適応が簡単ではないことを示唆している。

もちろん、一部の科学者や芸術家、エンジニアは、その思索、観察、研究を通じて、もう何十年も前から、過去に正しいと信じられていたことの限界や矛盾を発見できていたし、その問題を解決する知識を創造し、表現していた。しかし、情報技術が進歩すればするほど、より多くの人にこのプロセスを実現することが求められる。哲学者も歴史家たちも、決して小難しいことを言っていたのではなく、多くの人よりも早く、今日の社会について予測し、適応しようとしてきたに過ぎない。実際に、彼らの動機や問題のほとんど¹⁹は、21世紀になると広く共有され、解決が求められていることである。知識についての知識の改善の可能性、必要性、方法も、1980年代までには言語化され、伝達されているにもかかわらず、十分に実証され、共有されているとは言い難い。

米国とは明らかに異なる、この欧州に見られる動きは、工業化のように目に見える変化ではなく、かつて啓蒙の時代が体験された場所特有の動きとも言える。ドイツ語、英語、フランス語という言語の特徴が生み出した現象とも言えるだろう²⁰。なぜなら、最も早くに知識の問題を包括的に論じていた人々の多くは、多民族都市ウィーンやその近郊にいたからである。19世紀と20世紀のはざまに起きた「世紀末ウィーン」と呼ばれる現象は、次のような人々で構成されていた。精神分析のフロイト[1856-1939]、建築家のワグナー[1841-1918]、音楽家のマーラー[1860-1911]、物理学者マッハ[1838-1916]、そして、画家のクリムト[1862-1918]。クリムトが描いたウィーン大学の天井画が大スキャンダルを巻き起こしたところ、この大学に入学した学生の一人はシュンペーターであった²¹。創造的転回は、彼以来、描写されてきたイノベーションとは異なる、体験されたイノベーション、つまり創造という社会的プロセスの前提である。

5. 考察

本論文では、知識の問題に取り組んできた人々とその仕事を通じて、創造的転回について検討した。創造的転回とは、知識の問題の解決を前提する、情報技術の進歩への適応のプロセスである。

第一に、知識の問題とは、主観性の立場の対立を通じて発見できる、認識と認識における時間の問題であり、言葉やものに内在する経験、意味、合理性、より社会的には倫理と権力の問題である。本論文では、この問題に取り組んできた人々と、彼らの仕事の系譜を「知識についての知識の改善運動」と呼んだ。この記録に残された創造的転回は、「言語学的転回」とそこに至るプロセス、さらにその限界や矛盾を越えようとした人々の議論の変容である。彼らが問題化したのは、形而上学の問題、もう少し馴染みある言葉を使えば、いわゆる「文系」の見方や考え方であった。認識と認識における時間の問題は、20世紀初頭にベルクソンの『時間と自由』やハイデッガーの『存在と時間』において指摘されている。その後の哲学では、言語への関心が高まり、さらに、その限界や矛盾を越えようとする人々も現れた。

第二に、知識についての知識の改善運動は、啓蒙の時代に、ギリシャから継承した見方や考え方の限界や矛盾を問題化した人々の仕事であり、この動きは、啓蒙の時代が体験された場所にいた人々を中心に進んだ。知識の問題が提起されたのは、20世紀初頭のドイツ語圏である。科学界ではアインシュタインが登場し、芸術界では表現主義が広まった。その内部からの形式の破壊をめぐる議論は、ハイデッガーのみならず、シュンペーターのいう「創造的破壊」にも反映されている。しかし、知識の問題が広く共有されたのは、1960年代の英国であった。その象徴的な言葉は、C.P. スノーのいう『二つの文化』であり、歴史家たちの間では、この問題意識が共有されたあと、つくるという行為や、創造という社会的プロセスや、人々のイメージや意識に着目した経験の再構築が進んだ。しかし、知識の問題の解決に向けた議論は、1960年代から1980年代までのフランスを中心に行われている。

第三に、知識の問題を解決しようとしてきた人々が観察、描写したのは、創造的転回を構成する、啓蒙の時の民主化による、知識創造のパラダイムシフトと名付けることのできる二つの社会的プロセスである。啓蒙の時の民主化とは、「権力と能力との諸関係の間のパラドクス」に示される、「歴史的批判的実践」についての知識が普及することであり、知識創造のパラダイムシフトとは、知識の問題が社会的に解決されていくプロセスである。21世紀の欧州では、知識経済や共同経済という言葉を使い始め、政府、産業、大学にも、創造的転回を企てる動きが観察できるようになった。EUが掲げたリスボン戦略は、知識の問題の解決や、情報技術の進歩への適応が簡単ではないことまでを示してきた。創造的転回は、これまでの描写されたイノベーションとは異なる、体験されたイノベーション、つまり、創造という社会的プロセスの前提でもある。

6. 終わりに

本論文では、知識の問題に取り組んできた人々の仕事を通じて、創造的転回について検討した。「啓蒙」という言葉を使う時、日本では、正しい知識の普及を意味する言葉として使われることが多い²²が、啓蒙の時代が体験された場所において、この言葉は、正しいか否かを判断する方法が変化した出来事である。その意味は、ドイツ語圏、英語圏、フランス語圏では異なるものの、知識についての知識の改善運動は、この三つの言語の相互作用、つまり、長い間の議論や交流を通じて、その違いが有機的に結びつくことによって進められてきた。本論文ではまだ、2000年以降の欧州に見られた変化と、その背景となる議論を整理したに過ぎないが、創造的転回は、場と場で「体験された知識」に依存する現象である。次なる課題は、ブレア政権期以降の英国、その政府、産業、大学という場所を事例に、創造的転回について検討することである。

参考文献

- ・ Anderson, B. (1983, 1991). *Imagined Communities: Reflections on the origins and Spread of Nationalism* (1991 Revised and Expanded edition). London, UK. Verso. (白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年) .
- ・ Arvidsson, A., and Peitersen, N. (2016). *The Ethical Economy: Rebuilding Value After the Crisis*. New York, NY, USA. Columbia University Press.
- ・ Badir, S. (2004). *Hjlemslev*. Paris, France. Socieie d' edition les Bells Lettres. (町田健訳、『ソシュールの最大の後継者：イエラムスレウ』大修館書店、2007年) .
- ・ Bakhshi, H., Hargreaves, I., Mateos-Garcia, J. (2013). *A Manifesto for the Creative Economy*. London, UK. Nesta.
- ・ Barron, S. (1988). *German Expressionism 1915-1925*. LA, CA, USA. Los Angeles County Museum of Art.
- ・ Beals, D. (2005). *Enlightenment in Eighteenth-century Europe*, London, UK. I.B. Tauris.
- ・ Beil, R., Dillmann, C. (2011). *The Total artwork in Expressionism: Art, Film, Literature, Theater, Dance, and Architecture, 1905-25*. Ostfildern, Deutschland. Hatje Cantz Verlag.
- ・ Bergmann, G. (1967). *Logical positivism, language and the reconstruction of metaphysics in The Linguistic Turn: Essays in Philosophical Method*. Chicago, USA. University of Chicago Press.

- Bergson, H. (1957). *Hneri Bergson, Memoire et vie*, edited by Gilles Deleuze. Paris, France. Presses Universitaires de France. (前田英樹訳『記憶と生』未知谷、1999年、2009年) .
- Bersgon, H. (1907, 2007). *L'Évolution créatrice*. Paris, France. Les Presses Universitaires de France. (合田正人・松井久訳『創造的進化』筑摩書房、2010年)。
- Botsman, R. and Rogers, R. (2010) 'What's Mine Is Yours: How Collaborative Consumption is Changing the Way We Live.' New York, NY, USA. Harper Collins.
- British Museum, (2017). *Enlightenment: Room 1: Discovering the world in the 18th century*. London, UK. The Trustee of the British Museum.
- Cannadine, D. (1988) *Class in Britain*, New Haven, USA. Yale University Press. (平田雅博・吉田正広『イギリスの階級社会』日本経済評論社、2008年)。
- Carr, E.H., (1961) *What is History?* (The George Macaulay Trevelyan Lectures delivered in the University of Cambridge January- March 1961) , London, UK, Macmillan (清水幾太郎訳、『歴史とは何か』岩波新書、1962、2003年) .
- Cassirer, E. (1950). *The problem of Knowledge: philosophy, science and history since Hegel*. Translated by Woglom, W.H. and Hendel, C.W. New Haven, CT, USA. Yale University Press.
- Colley, L. (1992) *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, Newhaven, CT, USA. Yale University Press. (川北稔監訳、門永麻子・水野祥子・川本真浩・戸渡文子・中川順子訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版界、2000年) .
- Collini, S. (1993). *Introduction for the Two Cultures and Scientific Revolution by C.P. Snow*. Cambridge, UK. Cambridge University Press. (増田珠子訳「解説」『二つの文化と科学革命』みすず書房、2011年)。
- Crystal, D. (1987). *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge, UK. Cambridge University Press. (風間喜代三・長谷川欣佑監訳『言語学百科事典』大修館書店、1992年) .
- Daintith, J. (1976). *A Dictionary of Physical Sciences*. London, UK. Pan Books. (笹木和雄・田中昭二監訳『朝倉科学辞典シリーズ 物理化学辞典』朝倉書店、1980年) .
- Deleuze, G. (1966). *Le Bergsonisme*. Paris, France. Presses Universitaires de France. (宇波彰訳、『ベルクソンの哲学』法政大学出版局、1974年) .
- Deleuze, G. (1983). *Cinéma L'image-mouvement*” Paris, France. Éditions de Minuit. (財津理・斎藤範訳、『シネマ1 運動イメージ』法政大学出版局、2008年) .

- Deleuze, G. (1985) “Cinéma : L'image-temps” Paris, France. Éditions de Minuit. (宇野邦一・石原陽一郎・江澤健一郎・大原理志・岡村民夫訳、『シネマ 2 時間イメージ』法政大学出版局、2006 年) .
- Derrida, J. (1987). De l'esprit: Heidegger et la question. France. Editions Galilee. (港道隆訳『精神について：ハイデッガーと問い』平凡社、2010 年) .
- Derrida, J., Caputo, J. D. (1997). Deconstruction in a nutshell. New York, NY, USA. Fordham University Press. (高橋透・黒田晴之・衣笠正晃・胡屋武志訳『デリダとの対話：脱構築入門』法政大学出版局、2004 年)。
- Derrida, J., Patton, P., Smith, T. (2001). Jacques Derrida: Deconstruction Engaged: The Sydney Seminars. Sydney, Australia. Power Institute Foundation for Art and Visual Culture. (谷徹・亀井大輔訳『デリダ、脱構築を語る』岩波書店、2005 年)。
- Eco, U. (1976). A theory of Semiotics. Bloomington, IN, USA. Indiana University Press. (池上嘉彦訳『記号論』1-2、岩波書店、1996 年)。
- Eco, U. (1984). Semiotics and the Philosophy of Language. Bloomington, IN, USA. Indiana University Press. (谷口勇訳『記号論と言語哲学』国文社、1996 年)。
- Elger, D. (2007). Expressionism: A revolution in German Art. Köln, Deutschland. Taschen.
- European Commission. (2016). Communication from the Commission to the European Parliament, the Council, the European Economic and Social Committee and the Committee of the Regions: A European agenda for the collaborative economy. Brussels, Belgium. European Commission.
- Fellman, F. (1982). Phanomenologie und expressionismus, Freiburg/ Munchen, Germany. Verlag Karl Alber GmbH. (木田元訳、『現象学と表現主義』講談社、1994 年)。
- Foucault, M. (1966). Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines. Paris, France. Editions Gallimard. (渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物：人文科学の考古学』新潮社、1974 年)。
- Foucault, M. (1969). L'Archéologie du savoir. Paris, France. Éditions Gallimard. (慎改康之訳、『知の考古学』河出書房、2012 年) .
- Foucault, M. (1984). What is Enlightenment? (Qu'est-ce que les Lumières?) in Rainbow, ed., The Foucault Reader, New York. USA. Pantheon Books, 1984, pp. 32-50. (石田英敬訳、「啓蒙とは何か」『フォーコー・コレクション 6: 生政治・統治』小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編、筑摩書房、2006 年) .

- ・ Foucault, M. (1975) *Naissance de la prison, Surveiller et punir*. Paris, France. Éditions Gallimard. (田村俣訳『監獄の誕生：監視と処罰』新潮社、1977年)。
- ・ Galraith, J.K. (1977). *The age of uncertainty*. Boston, MA, USA. Houghton Mifflin Company. (斎藤精一郎訳『不確実性の時代』講談社、2009年)。
- ・ Gray, H.J. and Isaacs, A. (1991). *Dictionary of Physics Third Edition*. London, UK. Longman Group UK. (清水忠雄・清水文子監訳『ロングマン物理学辞典』朝倉書店、1998年)。
- ・ Habermas, J. (1962). *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Frankfurt am Main, Deutschland. Suhrkamp Verlag. (細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換：市民社会の一カテゴリーについての探究』未来社、1990年)。
- ・ Habermas, J. (1968). *Technik und wissenschaft als "ideologie"*. Frankfurt am Main, Deutschland. Suhrkamp Verlag. (長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社、2000年)。
- ・ Habermas, J. (1981). *Die modern: ein unvollendetes projekt, in kleine politshe schriften I-IV*. Frankfurt am Main, Deutschland. Suhrkamp Verlag. (三島憲一編訳『近代：未完のプロジェクト』岩波書店、2000年)。
- ・ Hampson, N. *The Enlightenment: An evaluation of its assumptions, attitudes and values*. London, UK. Penguin Books.
- ・ Hawkins, J. (2001). *Creative Economy: How people make money from ideas*, London, UK. Penguin Books.
- ・ Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*. (高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2015年)。
- ・ Heidegger, M. (1947). *Über den "Humanismus," Brief an Jean Beaufret*, Paris, France. (渡邊二郎訳『ヒューマニズムについて』筑摩書房、1997年)。
- ・ Heidegger, M. (1960) *Der Ursprung des Kunststewkes*. Stuttgart: Phillipp Reclamjun. Frankfurt, Deutschland. (関口浩訳『芸術作品の根源』平凡社、2008年)。
- ・ Hjelmslev, L. (1959). *Omkring sprogteoriens grund-laggelse*. Copenhagen, Danmark. Akademisk forlag. (trans. Whitfield, F.J. (1953). *Prolegomena to a theory of language*. Indiana University Publications in anthropology and linguistics, Memoir 7 of the International journal of American linguistics, Supplement to Vol 19., No. 1, pp.iv-92、林栄一訳、『世界言語学名著選集第6巻言語理論序説 (英語学ライブラリー41)』ゆまに書房、1998年)。

- Hobsbawm, E. (1983). *Inventing Tradition in The invention of Tradition*. Ed. Hobsbawm, E. and Ranger, T. Cambridge, UK. Press of the University of Cambridge. (前川啓治訳「序論-伝統は創り出される」『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年)。
- Horkheimer, M., Adorno, T.W. (1947). *Dialektik der aufklärung: philosophische Fragmente*. Amsterdam, Netherland. Querido Verlag. (徳永恂訳『啓蒙の弁償法：哲学的断想』岩波書店、2007年)。
- Husserl, E. (1901, 1928) . *Logische Untersuchungen : Band 2, Untersuchungen zur I. Teil. Vierte Auflage (unveränderter Abdruck der 2. Und Gearbeiteten Auflage)*. Halle, Deutschland. Max Niemeyer. (立松弘孝・松井良和・赤松宏訳『論理学研究 2』みすず書房、1978年)。
- Ingold, T. (2007). *Lines: A Brief Story*. London, UK. Routledge.
- Ingold, T. (2013). *Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture*. Oxen, UK. Routledge.
- Jähner, H. (1984) *Die Brücke*. Berlin, Deutschland. Henschelverlag GmbH. (土肥美夫・内藤道雄訳「ドイツ表現派ブリュッケ」岩波書店、1994年)。
- Kandinsky, H, Marc, F. (1912). *Der Blaue Reiter*. (岡田素之・相澤正巳訳『青騎士』白水社、2007年)。
- Kant, E. (1784). *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?* (福田喜一郎訳「啓蒙とは何か」『カント全集 14』岩波書店、2000年)。
- Kant, E. (1781, 1787) . *Kritik der reinen Vernunft*. (石川文康訳、『純粹理性批判』上・下、筑摩書房、2014年)。
- Kuhn, T. (1962). *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago, IL, USA. The University of Chicago Press. (中山茂訳、『科学革命の構造』みすず書房、1971年)。
- Lowith, K. (1941). *Von Hegel zu Nietzsche. Der revolutionäre Bruch im Denken des neunzehnten Jahrhunderts*. Stuttgart, Deutschland., Felix Meiner Verlag. (三島憲一訳『ヘーゲルからニーチェへ：19世紀思想における革命的断絶上・下』岩波書店、2016年)。
- Lynd, H.M. (1945). *England in the Eighteen Eighties: Toward a Social Basis for Freedom*, London, UK. Oxford University Press.
- Matthews, P.H. (1997). *Oxford Dictionary of Linguistics*. Oxford, UK. Oxford University Press. (中島平三・瀬田幸人訳『オックスフォード言語学辞典』朝倉書店、2009年)。

- McCraw, T. K. (2007). *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*. Cambridge, MA, USA. Harvard University Press. (八木紀一郎監訳、田村勝省訳『シュンペーター伝：革新による経済発展の預言者の生涯』一灯舎、2010年)。
- Metz, C. (1964). *Le cinema: langue ou langage?* Communications, Paris, Editions du Seuil, No. 4, pp..52-90. (木村建哉訳、「映画における現実感について」『映画における意味作用に関する試論：映画記号学の基本問題』 pp..21-39, 2005年、水声社)。
- Metz, C. (1968). *Essais sur la signification au cinema*. Paris, France. Editions Kincksieck. (浅沼圭司監訳『映画における意味作用についての試論：映画記号学の基本問題』水声社、2005年)。
- Metz, C. (1972). *Essais sur la signification au cinema, tome II*, Paris, France. Editions Kincksieck. (浅沼圭司監訳、『映画記号学の諸問題』書肆風の薔薇、1987年)。
- Mouffe, C. (1996). *Deconstruction and Pragmatism and the politics of Democracy*. In *Deconstruction and Pragmatism* edited by Mouffe, C. Taylor & Francis Books. (青木隆嘉訳、「脱構築およびプラグマティズムと民主政治」『脱構築とプラグマティズム』法政大学出版局)。
- März, E. (1983, 1991). *Joseph Schumpeter: Scholar, Teacher, and Politician*. New Haven, CO, USA. Yale University Press. (杉山忠平監訳、中山智賀子訳『シュムペーターのウィーン：人と学問』日本経済評論社、1998年)。
- Nietzsche, F. (1908). *Ecce Homo: wie man wird, was man ist*. In *Kritische Gesamtausgabe*, hg, von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. (丘沢静也訳、『この人を見よ』光文社、2016年)。
- Ogden, C. K., Richards, I. A. (1923). *The Meaning of Meaning*. 8th Ed. New York, NY, USA. Harcourt, Brace & World, Inc.
- Pagden, A. (2013) *The Enlightenment and why it still matters*. Oxford, UK. Oxford University Press.
- Pierce, C.S. (1931-35, 1958). *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols. 1-6, edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss (1931-1935); vols. 7 & 8, edited by Arthur W. Burks (1958). Cambridge, MA, USA. Harvard University Press.
- Porter, Roy (2000) *Enlightenment: Britain and the Creation of the Modern World*. England, UK. Penguin Books.
- Rapport, H. (1998). *Heidegger and Derrida: Reflections on Time and Language*. University of Nebraska Press. (港道隆・檜垣立哉・後藤博和・加藤恵介訳、『ハイデッカーとデリダ』法政大学出版局、2003年)。

- ・ Rorty, R. (1967) *The Linguistic Turn: Essays in Philosophical Method*. Chicago, USA. University of Chicago Press.
- ・ Russel, B. (1946). *History of Western Philosophy: and its connection with political and social circumstances from the earliest times to the present day*. London, UK. George Allen and Unwin. (市井三郎訳、『西洋哲学史 I, II, III』みすず書房、1970年)。
- ・ Schorske, C. E. (1961). *Fin -De- Siecle Vienna: Politis and Culture*. (安井琢磨訳、『世紀末ウィーン：政治と文化』岩波書店、2006年)。
- ・ Schumpeter, J. A. (1942, 1947, 1950). *Capitalism, Socialism and Democracy*. (大野一訳、「創造的破壊のプロセス」『資本主義、社会主義、民主主義 I/II』日経 BP 社、2016年)。
- ・ Sloan, K. (2003) *Enlightenment: Discovering the World in the eighteenth century*. London, UK. The British Museum.
- ・ Snow, C.P. (1959) *The Two Cultures and Scientific Revolution*. Cambridge, UK. Cambridge University Press. (松井卷之助訳『二つの文化と科学革命』みすず書房、1984年)
- ・ Stokes, K., Clarence, E., Anderson, L., Rinne, A. (2014). *Making Sense of the UK Collaborative Economy*. London, UK. Nesta, Collaborative Lab.
- ・ Taleb, N.N. (2007). *The Black Swan: The Impact of the Highly Improbable*. New York, USA. Random House. (望月衛訳、『ブラック・スワン：不確実性とリスクの本質 [上][下]』ダイヤモンド社、2007年)。
- ・ Tonnnies, F. (1887). *Gemeinschaft und Gesellschaft*, Leipzig, Deutschland. Fues. (杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト上・下』岩波文庫、1957年)。
- ・ Turner, G. (1996). *British Cultural Studies: An Introduction, second edition*. London, UK. Routledge. (溝上由紀・毛利義孝・鶴本香織・大熊高明・成実弘至・野村明宏・金智子訳、『カルチュラルスタディーズ入門：理論と英国での発展』作品社、1999年)。
- ・ Wallerstein, I. (1991). *Unthinking Social Science: The Limits of Nineteenth-century paradigms*. London, UK. Polity press. (本多健吉・高橋章監訳『脱=社会科学：19世紀パラダイムの限界』藤原書店、1993年)。
- ・ Weinhäupl, L. Weinhäupl, P. (2012). *Wien 1900, Vienna, Austria*. Christian Brandstätter verlag. (translation by David Wright).
- ・ アインシュタイン、アルバート『相対論の意味』矢野健太郎訳、岩波書店、2015年。
- ・ アリストテレス『形而上学』岩崎勉訳、講談社、1994年。

- ・ 飯田隆 (1997)『現代思想の冒険者たち 07 ウィトゲンシュタイン：言語の世界』講談社。
- ・ 池上嘉彦 (1984)『記号論への招待』岩波新書。
- ・ 石黒ひで (1993)「『言語論的転回』とはなにか」、『岩波講座現代思想 4 言語論的転回』pp..87-116 新田義弘・子安宣邦・丸山高司・村田純一・丸山圭三郎・三島憲一・佐々木力・野家啓一編、岩波書店。
- ・ 市川慎一 (1996)『百科全書派の世界』世界書院。
- ・ 今村仁司・三島憲一・鷺田清一・野家啓一 (1996)『現代思想の冒険者たち 00 現代思想の源流：マルクス・ニーチェ・フロイト・フッサール』講談社。
- ・ 加藤尚武編 (2012)『ヘーゲル「精神現象学」入門』、講談社。
- ・ 川崎修 (1998)『現代思想の冒険者たち 17 アレント：公共性の復権』講談社。
- ・ 木村めぐみ (2017)「表現する組織：創造的進化と創造的転回」一橋大学イノベーション研究センターワーキングペーパー#17-7.
- ・ 桜井哲夫 (1996)「現代思想の冒険者たち 26 フーコー：知と権力」講談社。
- ・ 佐藤慶幸 (1986)『ウェーバーからハバーマスへ』世界書院。
- ・ 篠原資明 (1997)『現代思想の冒険者たち 25 ドゥルーズ：ノマドロロジー』講談社。
- ・ 篠原資明 (1999)「現代思想の冒険者たち 29 エーコ：記号の時空」講談社。
- ・ 島本実 (2014)『計画の創発：サンシャイン計画と太陽光発電』有斐閣。
- ・ 鈴村和成 (1996)『現代思想の冒険者たち 21 バルト：テキストの快楽』講談社。
- ・ 千足伸行 (1995)「総論 芸術・自然・都市」『世界美術大全集 西洋編 26：表現主義と社会派』小学館、pp..9-16.
- ・ 千足伸行 (2009)『世紀末ウィーンの美術：クリムト、シーレらが活躍した黄金と退廃の帝都』東京美術出版。
- ・ 高田珠樹 (1996)『現代思想の冒険者たち 08 ハイデガー：存在の歴史』講談社。
- ・ 高橋哲哉 (1998)「現代思想の冒険者たち 28 デリダ：脱構築」講談社。
- ・ 高橋哲哉 (2015)『デリダ：脱構築と正義』講談社学術文庫。
- ・ 田中克彦 (2014)「『表現』ということばのエネルギー」『世界思想』41、pp.1-4. 世界思想社。
- ・ 田中春美ほか (1987)『現代言語学辞典』成美堂。
- ・ 都築貴博 (2007)「ムア G.E.」『イギリス哲学思想事典』pp..668-669, イギリス哲学学会編、研究社。
- ・ 中岡成文 (1996)「現代思想の冒険者たち 27 ハーバーマス：コミュニケーション行為」講談社。

- ・ NEDO(2008)『特集:欧米の研究開発制度：成長と雇用のためのリスボン戦略(EU)：3年間の成果と今後の取り組み』海外レポート NO.1018。
- ・ NEDO 技術開発機構情報・システム部 (2007)『特集:欧州での研究開発への取組 欧州テクノロジー・プラットフォーム：プラットフォーム概要・統合スマートシステム (EPoSS) 紹介』海外レポート NO.997。
- ・ 野家啓一 (1998)『現代思想の冒険者たち 24 クーン：パラダイム』講談社。
- ・ 延岡健太郎 (2011)『価値づくり経営の論理：日本製造業の生きる道』日本経済新聞出版社。
- ・ 橋本康二(2007)「ラッセル.B.」『イギリス哲学思想事典』P.674.イギリス哲学学会編、研究社
- ・ 物理学辞典編集委員会 (2005)『物理学辞典』三訂版、培風館。
- ・ 丸山圭三郎 (1985)『ソシユール小辞典』大修館書店、1985年。
- ・ 丸山圭三郎 (2012)『ソシユールを読む』講談社。
- ・ 三島憲一 (1998)『現代思想の冒険者たち 09 ベンヤミン：破壊・収集・記憶』講談社。
- ・ 宗像恵、中岡成文編著 (1995)『西洋哲学史 近代編：科学の形成と近代思想の展開』ミネルヴァ書房。
- ・ 八木紀一郎・清水耕一・徳丸宜穂『欧州統合と社会経済イノベーション：地域を基礎にした政策の進化』日本経済評論社、2017年)。
- ・ 矢代梓 (1997)『啓蒙のイロニー：ハーバーマスをめぐる論争史』未来社。
- ・ 山口誠一(2010)『ニーチェとヘーゲル：ディオニュソス哲学の地下通路』法政大学出版局。
- ・ 米澤克夫(2007)「ウィトゲンシュタイン.L」『イギリス哲学思想事典』p.571., イギリス哲学学会編、研究社。
- ・

注.

¹ 「描写された知識 knowledge by description」と「体験された知識 knowledge by acquaintance」は、バートランド・ラッセル[1872-1970]の議論に代表される、ギリシャ語やラテン語、フランス語やドイツ語にあって、英語にはなかった二つのタイプの知識を表す言葉である。前者は「直接的な経験よりも、情報やファクトを通じて蓄積される人、物や知覚についての知識」を、後者は「直接的な経験によって蓄積された人、物、知覚についての知識」を意味している。オックスフォード英語辞典オンライン版 (<http://www.oed.com>) を参照 (2018年2月15日最終アクセス)。

² グラスゴー大学のハンタリアン美術館の展示によると、グラスゴー郊外に生まれた解剖学者であり、医師であった、ジョン・ハンター[1728-1793]は、啓蒙時代を「知識の改善」運動と呼んだ。

³ Horkheimer & Adorno (1947)における引用文献 (Bacon, in Praise of knowledge, miscellaneous tracts upon human philosophy, the works of Francis bacon ed. Basil montage. London 1825, Band I.S. 254 f.) に基づく。

⁴ 大英博物館「啓蒙の部屋 (Enlightenment Room)」の展示による。

⁵ 言語「論」的転回と訳されることもある。

⁶ Cannadine (1998)は、言語学的転回を超えて行く必要性を主張し、次のような文章を注釈に加えている「多くの流行の方法論と同様に、「言語学的転回」もその提唱者の幾人かが主張するほど過去への独創的なアプローチではない。19世紀イギリスを研究する歴史家が二世代も前に言った次の言葉を考えてみよう。「言語は免れることができない環境の一部である。いかなる状況にあっても、私たちが目にするのは、その状況の物的な事実ではなく、私たちの時代と集団に関する特定の語彙を手がかりに、探求の仕方が示唆されることである(Lynd 1945)」。

⁷ フッサールは、記号を、表現 (有意味的記号) と指標に分け、後者を、「指示機能に加えて、さらに意味機能を果たすのでなければなにもも表現していない記号」と説明した。記号から指標をできる限り排除していき、純粹表現を明らかにしようとしたフッサールは、「孤独な心的生における独白」というこたえに辿り着いている。つまり、心の中で、ことばを使わずして、つぶやいている状態であり、そのこたえは、有意味的記号であるはずの表現が、記号ではない、つまり、その機能である伝達という役割を果たせていない、という矛盾を抱えることになった。

⁸ オックスフォード英語辞典オンライン版 <http://www.oed.com> (最終アクセス: 2018年2月15日)。

⁹ 「言語学的転回」とは、米国の哲学者リチャード・ローティが出版した論集のタイトルであり、その原稿の一つを書いた、グスタフ・バークマン[1906-1987]が使い始めた言葉である。Bergmann(1967)曰く、ウイトゲンシュタインのほか、ムーアやラッセルは、言語学的転回には直接関わっていないというもの、彼らとの交流の影響は否定できない。ムーアは、「思想形成期にはヘーゲル主義の影響を受けたが、その後は批判的立場から知覚の理論や認識論を展開」(都築 2007)し、分析哲学の基礎を築いた人物である。アインシュタインとの共同宣言でも知られるラッセルは、「数学的真理の絶対性・完全性・確実性を信じ」ていたが、「のちにウイトゲンシュタインの影響により、論理学も数学も単なるトートロジーに過ぎないことを認めるようになり」、「この研究の過程で見出された記述の理論は、その後の言語哲学の展開に対して決定的な影響を与えた」(橋本 2007)。

¹⁰ 石黒 (1993) の訳を引用している。

¹¹ 歴史的にラテン語から派生した諸言語からなる印欧語族の語派を研究する研究者の一門。

¹² ホブスボウムは、次のように述べている。「伝統の創出の研究は個別の学問領域を超えるものである。この分野は歴史家と社会人類学者そして他の人間科学の研究者を結びつけるもので、互いの協力なしでは適切な探求はなされないであろう」。

¹³ Deleuze (1983, 1985)は、近代科学が「時間を独立変数 (原因となる要因) とみなそうとする熱望によって定義されなければならない」こと、「人々が運動についてもはや (古代ギリシャ哲学における理性的に把握されうる総合は行わず、かえって、或る感性的な (例えばグラフや座標系で表現できるような) 総合を遂行していた) ことについて論じた。その研究者たちは、「運動を、もはや特権的な諸瞬間に連関させるということではなく、むしろ任意の瞬間に連関させるということであった」というのである。そして、主観性を捨て去るには、知覚、感情、行動だけでなく、欲動イメージ: 善や悪のフェティッシュ、反映イメージ: 行動と状況が間接的な関係に入るときに構成されるイメージ、関係イメージ: 運動を、運動が表現する全体に関係付け、運動の分配に従って全体を変化させるイメージについての分析が必要であることを示唆した。

¹⁴ 野家 (1998) によれば、「科学革命という概念は、現在二つの意味で使われている。一番目はコイレによって提起され、バターフィールドによって歴史学上の概念として定式化された用法であり、16 世紀中葉に始まり 17 世紀に集結した西欧における近代科学の成立とそれに伴う知的変革の過程を意味する。具体的には、コペルニクス『天球回転論』(1534)の刊行からニュートン『プリンキピア』(1687)にいたる 150 年間に生じた歴史的出来事を指す。…二番目はクーンの主著『科学革命の構造』において確立された用法であり、科学の歴史的発展過程を通じて繰り返す起りうる「パラダイム転換」の事態を意味する」。

¹⁵ 『言語理論序説』の日本語訳では、「系列」と訳されているが、一般的には「範列」という言葉が使われることが多い。

¹⁶ このような動きは、メディア研究のような、新しく出現した社会科学の分野だけではなく、いわゆる「ゲゼルシャフト」に分類されるような政治や経済、経営分野の議論でも見られるようになってきている。例えば、島本 (2014) の『計画の創発』における分析は、合理モデル、自然体系モデル、社会構築モデルという三つの観点で分析を行っており、「同一の政策や出来事であっても、分析の観点を変えることによって、知見や含意は全く異なる様相を呈する」ことを明らかにしている。島本は、三つめのアプローチを「相互行為のプロセスが事後的に社会現象を实在せしめ、関係性こそが現実を創造する」考え方として扱い、この議論が人文化学的な研究へと近づいていくことを指摘している。また、延岡 (2011) は、製品の価値を機能的価値と意味的価値に分類しているが、20 世紀の哲学の議論における意味の重要性や、意味についての議論の増加を考えると、まず人文的な次元、さらには、創造的な意味でのものづくりの重要性が高まっていると言える。

¹⁷ 知識経済とは、形式的には、「伝統的な生産手段ではなく、情報の効果的な獲得、普及、および利用に依存していると考えられる経済」である。オックスフォード英語辞典オンライン版 (<http://www.oed.com>) を参照 (2018 年 2 月 15 日最終アクセス)。

¹⁸ 欧州では、シェアリングエコノミーを共同経済 (collaborative economy: Botsman & Rogers 2010, Stokes, Clarence, Anderson & Rinne 2014, EC 2016) と呼ぶ傾向がある。このほか、創造経済 (Hawkins 2001, Bakhshi, Hargreaves & Mateos-Garcia 2013)、倫理経済 (Arvidsson & Peitersen 2016) など、長い間の議論と、その間の科学技術の進歩、社会的変容の結果として出現した経済には様々な捉え方がある。

¹⁹ フェイクニュースの氾濫によって、今日では、言葉に表されたことが正しいとは限らないことをほとんどの人が知っている。学校教育で正しいと習った単語を使ってみても、海外旅行や留学を通じて、その意味が必ずしも伝わらないという経験を持つ人も少なくない。さらに言えば、女性のほとんどが、選挙権を勝ち取るだけで理想の全てではなかったことも知っている。

²⁰ 例えば、ラッセルの議論に代表される「描写された知識」と「体験された知識」という区別は、ギリシャ語やラテン語、フランス語やドイツ語にはあったが、英語にはなかった言葉であった。一方、表現主義は、ドイツで興ったが、田中 (2014) によると、「表現 expression」という単語は、ドイツ語ではなく、英語から取り入れられた。デリダの「脱構築」もまた、ドイツ語で書かれたハイデggerのテキストをフランス語に翻訳する過程で生まれている。最近の「ポスト真実 (事実)」に象徴されるように、確実性の問題についての議論が行われてから、その事実が広く共有されるまでには、少なくとも、一世紀ほどの時と三つの言語の間を行き来した人々の働きを要したことになる。

²¹ シュンペーターは、英国が「大好きであった」ことに加えて、「どこにいても、自分がそこに本当に属している」と感じるができなかった (McCraw 2007)。彼の理論は、「ウィーンで支配的だった二つの学説を、特に彼の「経済発展の理論」において実りある統合へとまとめようとした」(März 1983)ものである。このことは、革新的な思索・観察・研究に必要な視点・思考・実践のプロセスとも言える。

²² 日本では、一般的に、啓蒙の時代は出来事として扱われ、啓蒙思想と呼ばれた思想を構成した人々とその仕事によって語られる。よく取り上げられる人物は、英国のトマス・ホッブス [1588-1679]、ジョン・ロック [1632-1704]、デイビッド・ヒューム [1711-1776]、アダム・スミス [1723-1790]、フランスのモンテスキュー [1689-1755]、ヴォルテール [1694-1788]、ルソー [1712-1778]、ドイツのクリスティアン・ヴォルフ [1679-1754]、レッシング [1729-1781]、それから、イマニュエル・カント [1724-1804] である。